（県立高等学校・中学校用）

熊本県立玉名高等学校附属中学校　令和３年度（２０２１年度）学校評価表

１ 学校教育目標

（１）教育方針

ア　「令和３年度（２０２１年度）県立中学校・高等学校における教育指導の重点」、「義務教育課取組の方向」及び「学校安全・安心推進課取組の重点」を踏まえ、本校の校訓「至誠・剛健・進取」の具現化に努め、徳・体・知の調和がとれた全人教育をめざす。

イ　これまで積み上げてきた本校の教育方針に基づき教職員が一体となって、家庭や地域との連携のもと、活力ある学校づくりをめざす。

（２）教育目標

ア　誠実さと奉仕の精神を持ち、高い志を掲げ、他者と協働して集団や社会に貢献できる生徒の育成

イ　文武両道に励み、物事に屈しない強い確かな意志と逞しい精神力を身につけた生徒の育成

ウ　自ら模範となり主体的に学習や課題解決に取り組む豊かな知性と感性を備えた生徒の育成

２ 本年度の重点目標（案）

（１）教育目標の実現に向けて

スローガン：夢実現・未来への挑戦　ENTERPRISE

ア　玉名高等学校附属中学校の生徒としての基本的な生活習慣の確立

イ　教師の授業力向上及び個に応じた相談対応、学習指導及び進路指導

ウ　日頃からの教職員間のコミュニケーションによる学校改革の推進

エ　特別活動（生徒会・部活動等）を生かし、自主性や創造性、奉仕の精神などの育成

オ　地域・保護者との連携

カ　読書活動の推進等、言語環境の整備

３ 自己評価総括表

評価項目 大項目	評価項目 小項目	評価の観点	具体的目標	具体的方策	評価	成果と課題
学校経営	学校の魅力化	将来の種まきとなる知的体験の充実	各学年で本物に触れる体験を充実する。	１年生は、地元の施設や人材を活用した地域理解の学習活動などを行う。 ２年生は、修学旅行での京都大学訪問などを実施する。 ３年生は、演劇のワークショップをとおした表現活動などに取り組む。	A	1・２年生は、新型コロナウイルス感染症の予防の観点から、対外的な取組の実施を見送った。 ３年生は、修学旅行では、前例のない九州３泊４日の行程で実施したが、大変充実した内容であった。演劇ワークショップは、新型コロナの影響により、最終的に英語劇の発表まではで

						きなかったが、継続的なワークショップの取組により、積極的に自己表現しようとする生徒が増えるなどの変容が見られた。
	業務改革・働き方改革	具体的な業務改善･縮減への取組	各分掌･係で複数の時間外勤務縮減のための改善を行う。	学期毎に振り返りを行い、業務の改善を進めるとともに、次年度に向けた実施要項の略案の作成に取りかかる。 部活動について、地域のクラブチームとの連携について検討するとともに、外部指導者などの人材の活用及び保護者との連携などの視点で部活動改革に取り組む。	B	行事等が終了時点で、反省事項を共有し、次年度の実施向けた検討を行った。教職員の負担感軽減に向けた職員研修の実施や業務の見直し等進めた。 部活動について、令和５年度から全国展開を予定している部活動改革に対応するため、玉名市と連携しながら合同部活動の取り組みを始めた。本校での部活再編のための検討を継続して行った。
学力向上	質の高い授業の工夫と実践	将来の学びに通じる授業の実践	質の高い授業を実感できる生徒が９割以上にする。	先取り学習、高校教職員による講座、探究活動や模擬試験、検定等の充実に取り組む。 「指導と評価の一体化」のための評価方法の工夫を行う。	A	各教科による先取り学習の推進や、３年生を対象とした高校教職員による講演会の実施など、併設型中高一貫校の特性を生かした取組ができた。84％の生徒が、「質の高い授業の実施」がなされていると認識するに至った。 「指導と評価の一体化」の推進のため、職員研修の実施に加え、継続して評価方法について、教職員で情報共有を行い、工夫改善を図った。

	個に応じた学習指導の工夫改善	一人一人に達成感のある学習指導の実践	一人一人に応じた学習指導を実感できる生徒が９割以上にする。	少人数クラスの実践と個々の学力に応じた個別指導の実践に取り組む。	A	数学、英語で習熟度授業を展開し、習熟度ごとの課題も設定することで、個に応じた学習内容の定着を図り、学力の伸長が見られる。習熟度に低い生徒に対する指導方法については、更なる工夫改善が必要である。
中高一貫教育	中高６年間を見通した教育活動の充実	中高連携の充実、教育資源の活用	学習、学校行事、部活動等で、中高で連動して取り組む。	授業や夏季講座等での中高の連携、中高合同の学校行事の充実を図る。 中高合同での教科会の実施や充実。 部活動での中高の連携を図る。	A	新型コロナウイルス感染症の拡大のため、当初予定していた中高合同の各種行事の多くが、中止や延期となったが、オンライン中継等により、生徒は高校生の取組を知ることができた。 夏季休業中に高校生対象の特別講座に希望生徒を参加させるなど、学習面での中高連携も進めることができた。 部活動では、文化系部活動を中心に、中高合同で各種大会へ参加した結果、全国大会へ出場を果たす等の実績を残した。また、中学３年生の高校部活動への早期入部体験も実施することができた。
キャリア教育（進路指導）	将来の夢や生き方を考える機会の充実	自身の未来像を描き、大学や職業について考える機会の充実	将来の夢や生き方について考えることができる生徒が９割以上にする。	専門的な職業に従事する人物や、大学関係者など、進路に係る外部講師を招聘し、進路講演会を実施する。 卒業生や高校生との交流をはじ	A	新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、外部より講師等を招へいしての講演会や、インターンシップなど、対外的な取組がほとんどできな

				め、生徒が興味を抱いている職業に関する職場体験を実施する。		かった。県内ＡＬＴの協力を得て実施した英語合宿（校内日帰りで実施）において、本校卒業生のニュージーランドの留学経験者を講師として迎え、海外の生活や文化および留学体験の意義などについて、講義を聴く機会を作ることができた。
生徒指導	自主的・自律的に判断・行動できる生徒の育成	様々な教育活動をとおした健康的な生活リズムの確立	遅刻ゼロを目指すとともに、教科及び保健指導をとおして日常生活のリズムを確立させる。	朝の健康観察を欠かさず行い、学級活動や集会等をとおして時間を守ることや、健康の大切さを理解させ、健康的な生活リズムを確立させる。	B	毎朝の健康観察等により、生徒の心身の状態の把握に努めたが、昨年度に続き、コロナ禍による分散登校などの日程変更もあり、「遅刻ゼロ」や「日常のリズムの確立」が十分と言えない生徒が散見される。
		交通安全意識の高揚及びマナー指導	登下校における自転車の安全な乗り方や、公共交通機関でのマナー等を確立させる。	登校指導を全職員で実施する。全校集会や日常指導、学級通信等を通じて交通マナーについて啓発する。	B	公共交通機関の利用時のマナーについて、地域から改善を求める声があり、継続した指導が必要と考えられる。
	生徒会・部活動等の活性化	生徒会や委員会活動をとおした主体性の育成	生徒が主体的、計画的に取り組む生徒会活動を確立させる。	生徒会活動や委員会活動の機会・時間を確保し、内容の充実を図る。	A	新型コロナウイルスの感染予防として、タブレット等を利用してのリモートによる練習を行うなどの工夫をし、体育祭を実施することできた。生徒がリーダーシップを発揮して、生徒会行事を工夫を凝らしつつ、企画運営することができた。

		学習と部活動の両立	学習と部活動を両立できる、効率よく、内容が充実した部活動を行う。	年間計画、月毎の計画を作成し、効率よく充実した部活動を行う。	A	コロナ下での制限がある中で、感染拡大防止に努めながら、状況に応じて充実した活動を行うことができた。
人権教育	自他ともに大切にする人権意識の涵養	差別や偏見に気づき、その背景を理解しようとする態度の育成	人権教育の充実を実感できる生徒を９割以上にする。	道徳での取組のほか、学級活動における学級旗の製作、人権標語の作成及び人権集会を実施し、生徒が自他の人権について考える機会を設ける。	A	人権集会をリモートの形で実施した。人権作文においても熊本県の優秀作品に２名が選出された。各学級においても仲間づくりを目的としたグループ活動を実施し、自他共に大切にする雰囲気づくりを行った。
	「命を大切にする心」を育む教育の充実	命の大切さに気づき、自他の命を大切にしようとする態度の育成	命の大切さに気づかせる場面の設定と学びを深める返しの実践	道徳での取組に加え、ゲストティーチャーを招いての人権学習の実施のほか、性教育に係る学習会や福祉体験ボランティア活動を行う。 防災避難訓練において、緊急時の対応の仕方について、自助と共助の双方の学びを行う。	A	道徳での取組に加え、保健師を講師に招いての性教育を行ったり、SC によるソーシャルスキルトレーニングを行い、命の大切さを感じる場面や命を守る実践力を育てる場面を設定した。
いじめの防止等	いじめの未然防止と早期発見	いじめの本質に気づき、いじめのない学級･学校づくりに貢献できる意識の涵養	生徒と関わり、生徒一人ひとりの理解を深める。 心のアンケート等の実施と適切な対応を徹底する。	日常の生徒の状況の観察、スコラ手帳等を利用した「生徒の小さな変化や兆し」への目配り気配りを行う。 心のアンケートや教育相談をとおして生徒の状況を細かく掌握する。 学級旗の作成や人権ボランティア委員会の活動をとおして、「いじめを許さない集団づくり」を行う。	A	心のアンケートや教育相談に加え、日常の観察を通して、生徒どうしを常に把握し、教職員で共通理解を図った。また、必要に応じて状況改善に向けての支援ができた。

特別支援教育	教育相談の充実と一人ひとりに応じた支援の充実	生徒理解を深め、個別の支援等の実践	生徒理解の共有、個別の支援体制の確立と実践	引き継ぎ事項等に基づき、特別な支援を要する生徒を把握し、教職員間での生徒理解の共有を行う。 教育相談による生徒の困り感の把握や、別室登校等による個に応じた支援などをＳＣ等との連携を含め組織的に行う。	B	毎学期、教育相談を行った。その他の月は心のアンケートを実施し、一人ひとりに応じた対応に努めた。不登校の生徒については保護者との連携も行い、進めてきた。対応の結果、改善しているケースもあるが、改善が見られないケースもあった。
学校保健・学校安全	安全な学校づくり及び自ら健康で安全な生活を実践できる生徒の育成	安全･安心な学習環境の確保と健康的な教育活動の支援	安全点検等を実施し怪我等の未然防止に努める。 生徒の健康状態・出席状況を把握し、適切に対応する。	安全点検を月に1回行い、安全で安心な学校作りをすすめるとともに、学活、保健委員会の活動等をとおして、健康な生徒の育成を図る。 健康診断や日々の健康観察に基づき、職員連絡会等を利用し、生徒情報を共有し、教職員間で支援等について連携を図る。	A	定期の安全点検に加えて、日頃から修繕が必要な箇所の発見や処置などに職員が連携して取り組めた。
		自ら心身の健康保持・増進を行うことのできる力の育成	自身の健康保持や増進について、肯定感を持つ生徒が９割以上	保健体育での学びのほか、保健だよりを毎月発行し健康衛生に関する意識高揚を図る。 ストレス対処教育の一環として、アンガーマネジメントやアサーショントレーニングなどのプログラムを行うとともに､学年レクレーションなどを行い、良好な対人関係の構築の契機とする。	A	今年度は分散登校や行事の中止など、生徒の心身に様々な影響を与える出来事が多かった。保健体育の授業はもとより、１年生にストレスマネジメント、２年生にアサーショントレーニングを行い心身の健康について考えさせることができた。また、環境衛生についても生徒自身がしっかりと取り組めていた。

環境教育	環境について考え行動のできる生徒の育成	省エネや環境保全に自主的に取り組む態度の育成	生徒自身で、教室の環境整備に取り組み、環境ボランティア活動やリサイクル活動を企画・実践できる。	生徒会活動をとおして、生徒の意識を高め、学校版環境 ISO の取組を推進する。 日常の清掃活動にも力を入れる。	A	リサイクル活動や、校外の清掃活動等生徒会を中心に積極的に取り組むことができた。 日常の清掃活動については今後も指導を継続していく。
情報教育	情報リテラシーの涵養	将来に亘って有用な情報リテラシー、情報モラルを身に付ける。	多様な場面で ICT を活用し、技術家庭で学んだ情報リテラシーや情報モラルが多様な生活の場面で実践できるようにする。	技術家庭での基礎的な学びをはじめとし、他教科や総合的な学習の時間で ICT 活用を推進する。 生徒１人に１台支給された Chromebook などを活用し、主体的に自らの学習課題や探究テーマに対して取り組む。	A	オンライン授業の実施に伴う一人１台端末の整備等により、授業だけでなく様々な場面で、ICT を活用した教育活動が飛躍的に進み、教職員および生徒のスキルが高まった。 端末の活用を進める中で、予期しなかった課題も発見され、情報リテラシーや情報モラルに関するなお一層の指導の充実が必要である。
読書指導	読書による豊かな感性の育成	読書に親しみ、豊かな感性と幅広い知識を身に付ける。	読書の充実及び図書館利用に肯定感を持つ生徒を９割以上にする。	図書委員会の活動（図書紹介、朝読書の啓発、貸出業務、書架整理）を推進する。 毎学期各クラスで図書館終礼をしたり、図書館だよりを発行したりすることで、生徒の読書活動に関する啓発を行う。 読書感想文･感想画の取組や各教科での読書紹介などの取組を行う。	A	図書館の中学生特設コーナーの展示を各学年の図書委員が交代で行い、季節に合わせた読書推薦図書を案内することができた。 図書館終礼は計画どおり実施し、図書館利用・本の貸し出しを勧めた。 読書感想文・読書感想画に全員で取り組み、多くの生徒が入選した。
保護者･地域との連携(ｺﾐｭﾆﾃｨ･	保護者や育友会との連携	各種の通信・学校 HP､授業参観等を通した保護者との連携	学校との連携に肯定感を持つ保護者を９割以上にする。	学級通信の発行、「附属中ブログ」などの学校 HP による情報発信などのほ	A	学校全体としての授業参観は実施できなかったが、学年毎に分けて授業参観と

ｽｸｰﾙなど）				か、授業参観、学年保護者会等を実施することにより、学校の取組について保護者のみならず地域へ魅力発信を行う。		学年保護者会を実施した。学級通信は各クラス毎に毎週発行されており、生徒の様子を保護者へこまめに発信できた。
	地域との連携、地域への貢献	地域・郷土を理解し、地域に貢献しようとする生徒の育成	地域との連携に肯定感を持つ生徒を９割以上にする。	地域理解（総合的な学習の時間）、職業体験、地域ボランティア活動など、積極的に生徒を地域に派遣し、地域の実情を肌で知り、地域の資源や人々との関わりの大切さについて学ぶ。 災害時の地域との連携や対応マニュアルについて見直しを行う。	A	新型コロナにより、対外的な取組が制限される中で、生徒会を中心として、地域の公園等の清掃ボランティアを企画したところ、５０名を超える生徒の参加希望があった。 災害時の対応マニュアルに基づいた、緊急時の確認メモの整理などの見直しを行った。

４ 学校関係者評価
【学校経営】 ・玉名高校の強みは、中高一貫教育校として魅力化が図られている点が大きい。 ・「中高一貫」のアピールは、地域の中学生にとっては、高進生として玉名高校に進学することが、中高一貫の魅力を享受できないという「負のイメージ」を抱くことにつながり、玉名高校を敬遠することにつながる側面がある。 ・働き方改革については、６年間を見通して余裕を持った運営ができないか。そのことで中高一貫校としての魅力化にもつながる。 【学力向上】 ・学校は知識を習得する場ではなく、学ぶ力を得る場となってほしい。 【中高一貫教育】 ・中高一貫教育の推進について、職員が課題意識を持っていることは重要であり、地域と一体となって考えていく必要がある。 ・中高一貫教育の魅力を伝え続けることは必要である。中進生だけでなく、高進生の魅力についても、様々な面から総合的に捉えることが大事である。 【キャリア教育（進路指導）】 ・玉名高校の魅力は「大学進学」というイメージが強い。本当の魅力をもっと発信すべき。 ・個人的な経験では、玉名高校での色々と工夫された先生方の取り組みから得られた体験は通常のカリキュラムでは得られない、生涯に渡っての学びの基礎や生きる知恵の元になっている。 【生徒指導】 ・生徒指導（基本的生活習慣の確立）の項目で生徒の意見が生かされ、女子制服の半袖を次年度導入することは、大変評価できる。玉名高校の卒業生として、学生時代より「なぜ？」という思いを持っていた。 ・生徒指導の項目において、コロナ禍にあっても活発な生徒会活動が行われていることに敬意を表したい。 【いじめの防止等】 ・高校では、学期に1回の心のアンケートを実施とあるが、年に２回ではなく、内容をいじめに絞った形の簡単なアンケートを行う必要はないのかと感じる。 【地域連携（コミュニティー・スクール）など】 ・本年度、学校運営協議会を２回開催した。各委員から忌憚のない意見が出された。会に対する信頼感の表れだと嬉しく思う。

・玉名市との連携を、さらに密接に図りながら、学校教育活動の充実に努めてほしい。
【学校保健・学校安全】
・コロナウイルス感染症対応に関する取り組みは素晴らしい。
【保護者・地域との連携】
・県立高３校・私立高２校の存在は、地域の魅力発信につながっている。地域にとって高校生の存在は重要。日々の学びを学校外に発信することで、自己肯定感を高め、気づきを持ち、視野を広げることができる。地域の広報誌でも紹介している。地域の総合計画の中に、高校生のワークショップも位置づけ取り組んでいるところである。地域の一部には過疎指定がなされているところもあり、高校生の活躍が、活性化に役立っていくと考えられる。どんどん地域に出て、地域とつながる高校生を育てて欲しい。
【新しい学びの推進】
・新しい学びの推進（ＩＣＴを利用した学習活動の充実）で先生方の負担感も高いものと思われる。ＩＣＴの活用が手段ではなく、目的にならないように注意する必要がある。
【その他全般】
・生徒にも職員の頑張りが伝わると良い。
・アンケート評価を見るに、全般的に、生徒、保護者の評価も高く、また、自分自身も育友会の代表として関わらせて頂く中で、教育活動全般において高く評価したいと考える。引き続き、本校の魅力化アップ等、ご尽力頂きたい。

５ 総合評価

【全般】
・学校関係者評価委員会の意見を踏まえ、自己評価を再点検し、成果をより重視した達成度を評価する。
【学校経営】
・新型コロナウイルス感染症の感染拡大に伴い、学校行事等の多くの取組が中止や延期を余儀なくされる中で、中高一貫校としての特性を最大限に生かし、「本物に触れる教育」等の取組を行い、魅力化の推進を行った。その結果、本年度の中学入試の出願倍率が２．０倍に達するなどの結果を得ることができた。
・業務改善・働き方改革について、負担感軽減のための職員研修（中学校のみ）の実施や、ＩＣＴの積極活用等によるできうる限りの業務改善に努めた結果、一定の成果をあげることができた。本年度は、コロナ禍の中で、部活動や課外活動に制約があったことも、職員の在校等時間の縮減に少なからず影響があったと考えられる。通常の教育活動が再開された場合を想定し、引き続き状況改善に検討していく必要がある。
・安心・安全な学校づくりの推進について、コロナウイルス感染症対策を中心に、高い危機意識を持って教育活動に取り組むことができた。コロナ禍の中、学校行事の実施に向け、何ができるかを職員・生徒・保護者が一体となって考え、取り組むことができた。
【学力向上】
・中高一貫校という特長を生かし、６年間の教育内容の系統的で計画的な指導体制の確立が必要である。そのために、高校の教育課程編成等の動向を把握し、連携しながら「先取り学習」や日々の授業計画の見直しについて検討を開始した。また、長期休業期間を利用した、高校生への特別授業への参加などについても取り組むことができた。
・個に応じた学習指導について、数学と英語を中心に、習熟度別展開授業は可能な限り実施してきた。今後は、高校入学時点での習熟度別展開の在り方についても、中高の連続性を保つことができるよう、授業の在り方等について分析と検証を行う必要がある。
【中高一貫教育】
・高校の学習内容の「先取り学習」や部活動の連携など、本年度も高校と協議しながら中高一貫校としての魅力の最大化に努め、生徒をはじめ保護者や地域から高い評価を得ることができた。来年度、附属中学校の１０期生が卒業の節目を迎えるにあたり、中高６年間を見通した、シラバスの作成、キャリア教育および部活動を含めた特別活動等の在り方について、これまでの検証を踏まえ、更なる改善を図っていく必要がある。
【キャリア教育（進路指導）】
・インターンシップや大学訪問など、対外的な進路学習の機会が、新型コロナウイルス感染症の感染状況の拡大により中止せざるを得なくなり、計画していた進路学習を見直した。次年度に延期できるもの、形式や内容を変えて実施できるものを選別し、最大限の効果が発揮できるようにした。中高６年間を見据えた、長期のスパンでの指導の在り方を視野に、次年度の計画の見直しを行う必要がある。
【生徒指導】
・昨年度より、生徒が主体性を尊重し、自ら考え行動できる生徒を育成できるように、生徒を交えた校則の改定等に取り組んできたところであったが、本年度はその実践を通じて課題を焦点化することができた。生徒自身が自ら考え、関係者と協議することを通して、自己や集団のあるべき姿について、自覚し実践できるよう継続して取り組む必要がある。また、今年度は、生徒会主催の行事が、新型コロナウイルス感染症の感染拡大により中止や延期せざるを得なくなり、活動が大幅に制限されてしまった。しかし、生徒会を中心に限られた条件下で最大限できることを考え、体育祭等の行事を実施したり、情報端末を活用しリモートで生

徒会活動等について協議したりするなど、生徒の主体性が発揮される場面を幾度も見ることができた。

【人権教育の推進】

・中高合同の校内職員研修を校長講話として実施できたほか、中学校の職員相互で、授業や特別活動等の指導に際して、人権教育上の留意点や気づきについて意見を出し合い、日々の実践に反映させることができた。

【いじめの防止等】

・「心のアンケート」のほか、月１回を目処に生活アンケートを実施し、いじめの未然防止と早期発見に向けて取り組んだ。また、生徒一人ひとりに生活記録ノート「スコラ手帳」への記入をさせ、担任との日々のやり取りを継続することで、生徒の悩みや生活の小さな変化に対する気づきの手立てとした。その結果、いじめの把握・認知・早期対応につなげることができたほか、いじめの未然防止に役立てることができた。

【特別支援教育】

・個別の支援計画・指導計画の作成に加え、特別な支援を必要とする生徒や気になる生徒の対応について、日々職員朝会等で情報共有を図った。また定期的に教育相談を実施し、生徒の困り感を把握し、個に応じた支援の充実を図った。今後、個々の環境や特性に応じた支援について検討し、生徒の学びと成長の支援に努めたい。

【学校保健・学校】

・生徒自身が主体的に心身の健康や安全について考え行動することができるように、健康教育や安全教育に取り組んだ。特に、新型コロナウイルス感染症の予防について指導を徹底するとともに、コロナ禍での生徒の精神面への影響を考慮し、健康観察の更なる徹底および気になる生徒への声かけや面談等を継続して行うことができた。

【環境教育】

・生徒会を中心として、リサイクル活動や校外清掃活動など、学校版環境ＩＳＯの取組を行うことで、生徒の環境に対する意識高揚と日々の実践活動につなげることができた。

【情報教育】

・「１人１台端末」として支給されたChromebookを活用し、コロナ禍の中でのオンライン授業での活用をとおして、生徒および教職員のスキルが格段に高まった。活用上のモラルやリテラシーについての課題も明らかになり、次年度に向けて指導方法をさらに検討し充実させる必要がある。

【読書指導】

・例年実施している「図書館終礼」が、コロナ禍による分散登校等でほとんど実施できず、学校図書の利用数は思うように伸びなかったが、図書委員を中心とした特設の図書案内の設置や、読書感想文等の取組により、生徒の読書に対する意識高揚を図ることができた。今後、教職員による図書紹介の実施などをとおして更なる読書推進に努める予定である。

【保護者・地域との連携】

・学校からの情報発信については、授業参観や公開授業がコロナ禍によりほとんど実施できなかったため、学校ホームページや学級通信によるものにとどまってしまったが、体育祭などの学校行事をオンラインで視聴できるよう対応したり、学年を限定して授業や行事の参観を行えるよう配慮したりして、少しでも生徒の様子を保護者に見てもらえるように工夫を行った。

・総合型コミュニティー・スクールに関しては、各方面から参加された委員の的確な意見を伺うことができ、学校の課題や更なる魅力の発見へとつなげることができた。提言を踏まえ、次年度に向けた方策を、中高が連携しつつ、更なる教育活動の充実と発展のために取り組んでいきたい。